

## 第二章 富山国体

### 一 昭和初期の電気製品

平成十二年度の三年生 安藤（淵マネ）（内山マネ）高島（伊奈東）成井（御所ヶ丘）

野田（小島）宮原（愛宕）山本（長与）高橋（淵）

平成十一年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン 高島 成井 宮原 永石 重村妹

野田 膝蓋骨折（六月八日）リハビリ中

花田 九月二七日 下腿三頭筋断裂休養中

#### 【案内文書】

私の心の奥底にはまだ怒りの残り火がくすぶっています。

私の笑顔が消えました。私の口数が少なくなりました。それが自分でもわかります。

私がそつですから選手の表情も冴えませぬ。だからといって無理矢理明るく振る舞ったり、選手の機嫌を取って雰囲気盛り上げてやったりする気にはまったくなれませぬ。私の気持ち晴れる時は選手がうまくなったとか強くなったと感じた時ではありません。試合を大差で勝った時でもありません。選手が「少しおとなになったなあ」と感じられた時です。少しだけでいいのです。ほんの少しおとなになってくれればあとは私の手できいかにようにも料理することはできます。

バスケットの構想は…

成井・永石のシュートをメインにオフェンスの組み立てを考える（当初から変わっていない構想）。

速攻からの得点を増やさなければならぬ（重要課題）。

ザルで水をすくうようなディフェンスをなんとかしなければならぬ（最重要課題）。

最近変わったことは…

重村姉をガードからフォワードにコンバートし、重村妹をガードにした。

村川をフォワードではなくハイポストでプレイさせることにした。

というように、構想ははっきりしており、それを理解させ発展させるための練習はいくらでも用意してあります。選手が私からチェックされる内容はバスケットの内容ではなく個人としての在り方を問われる内容が圧倒的に多いというのが実情で練習が先に進みませぬ。最近私からチェックされる内容を選手が気にしながら練習していますから、入学当初よりも迷いが多いし中途半端なプレイが目立ちます。そんな選手たちには山崎語録の中から次のメッセージを送ります。

「自由に伸び伸びやる練習から強さは生まれぬ」

「自分の愚かさ気がついた時、成長の第一歩が始まる」

「スランプは飛躍の前兆」

今年も当分の間、選手がごん底に落ち込んで私も手は差しおけません。彼女たちに最も欠けているもの、それは自立だと思っております。選手の態度に「自ら思う」「自ら行動する」が感じられるようになるまで…

#### 【結果報告】

「私たちはごんつやっても負けるんじゃないかしら。そう思った時があったらどっ」と成井に聞きました。三連休最後の日の一〇月十一日のことです。成井の目には見る間に涙が溜まってきてコックリしました。成井だけではなくそれは全員同じだったと思います。

九日。三連休の第一日目。徳島城北との練習試合。二〇点の大差で負けました。九月六日以降、チームはどんどん下降線をたどり、最悪の状態で合宿に入った初日のことでした。城北の富田先生から「元気がないですね」と言われました。

二日目。現在チーム内でもっとも優柔不断な村川をはずして宮原を投入し、攻撃のスタイルも全員がどこのポジションでも受け持つオールアウトにしました。するとチームが生き返りました。

宮原は現在の選手の中ではもっとも使いにくい選手でした。それこそ村川よりももっと優柔不断でしかもケガや病気がかりしていました。だからずっと三年生側に入れて主力選手の相手役ばかりさせていました。その宮原を背に腹は替えられず使ったところ水を得た魚のように宮原が動くのです。それに呼応するように他の四人の動きも滑らかになりました。たぶん、宮原は三年生の中に入って重圧のかけられないプレイをしているうちにタイミングを覚えたのでしょう。さらに、再び起用されるようになった喜びが宮原の心の奥底から積極性を引き出したのだと思います。

というわけで、連休は最初に一敗しただけであとは全勝。ホツとした選手たちを集めて冒頭の質問をしたわけです。選手たちは「もう二度とあんな思いはしたくない」と思っていることだと思えます。そのような体験の積み重ねが人間を大きくしていくのです。

村川にはかわいそうなことをしました。でもそれは実力で挽回しなければ誰にもできません。宮原がそうであつたように「私はもう使ってもらえないんじゃないか」という気持ちを味わえばいいんです。それで悲嘆にくれてばかりいけば埋もれてしまうでしょうし、挽回のチャンスを作る努力を続けなければまた日が差してくるでしょう。いいことも悪いことも順番です。悪い順番が回って来た時に何をしたら自分の財産になるのです。

日が差すと言えば高島が復活しました。九ヶ月も戦列を離れていたのに、連休中の強化試合と地区新人戦で動きの選択がもっとも正しいのが高島でした。戦列を離れていた間のシミュレーションバスケットで自分の感覚を磨いていたのでしょう。これは本当に驚きでした。高島の復活には心からおめでとつと言いたいです。しかし、チーム全体にはまだまだおめでとつとは言えません。一年生の人間的未熟さがまだ未解決だからです。特に、花田と村川の両選手はこれまでの高島と宮原の気持ちをいやというほど味わわせなければなりません。それが本当にわかるようになった時、彼女たちもまた一歩おとなに近づいているでしょう。

追伸

地区新人戦直後に国体があつたので、地区新人戦の報告は国体の報告と同時に送ることにしました。待たせてすみません。国体報告書は選抜チームの監督の立場で書かなければなりませんから内輪のことは書けません。なので、新人戦の紙面を借りて鶴鳴選手の国体での出来事のひとつを紹介します。高橋彩が高校最後の公式戦で最高の働きしてくれました。こんな働きをしてくれたらウィンターカップ予選は負けなかったのに：と思います。それは飲み込んで高橋にエールを送りたいと思います。昨年一〇月に大スランプに陥り、一時はバスケットを辞めることを考えた彼女はこうして復活し、卒業後は実業団でプレイします。頑張れラック。

【後日談】

この年の一月二日に前十字靭帯と半月板を傷めた高島淳子と、同じくこの年の六月八日に膝蓋骨を骨折した野田仁美と、同じく一〇月十一日に「私たちはどこをやっても負けるんじゃないかしらと思つた時があつただろ？」と私から言われ、目に一杯涙を溜めてコックリした成井千夏のことについて述べておきたい。

まず高島、彼女は茨城の伊奈東中学校出身である。高島の父親から淳子も鶴鳴でバスケットをやらせたいがだめだろうかという問い合わせがあつた。伊奈東中学校からは工藤姉妹と武藤陽子が平成四年から六年にかけて立て続けに鶴鳴に来ている。高島家は工藤家と親戚みたいな家族つきあいをしているので、高島家には鶴鳴の情報は漏れなくインプットされていて、父親としては「自分の娘も工藤姉妹のように：」という思いが募っていったのだ。私は淳子のプレイを実際に見ていない。だから私は、茨城のバスケットボール関係者に問い合わせをして彼女の人となりを調べた。情報からは身体的資質や技術は工藤雅子と比べて遜色のない選手ようだった。しかし私は断つた。

実は工藤家は三姉妹ともバスケットをしていて、その中の二人が鶴鳴に来ており、父親から末娘の早苗も

鶴鳴でやらせたいという申し出があった。私はそれを断っている。姉二人は選手としても実績を挙げ、卒業後も関東の国立大学に進学した。成功例である。しかし、個人的には二人とも全国レベルの選手ではない。本人の並々ならぬ努力と、チームメイトに恵まれたから出せた結果であり、誰でも鶴鳴に来たらそうなるというものではない。

だから私は断ったのである。「だめだ、早苗は成功するとは限らない。三人も外に出すな。一人ぐらい親元に置いておけ」と私。「いや、成功するとかそんなんじやなくて、鶴鳴に三年間在籍するだけでいいんですよ」と父親。「いやいや、ダメだ」と私。その日だけでなく、その後も父親との問答が続いたが結局父親はあきらめた。

そんなことがあったので私は高島を断ったのである。おそらく高島の父親は早苗を断られた経緯を工藤の父親から聞いているはずなので、私の「ダメだ」を理解し、あきらめてくれたと思っていた。ところがそれからしばらくしてまた高島の父親から電話がかかってきた。「先生、どうしてもだめですか。選手になれなくてもいいですよ。ただ鶴鳴で三年間がんばってくれば……」父親の声は悲痛で、今にも泣き出しそうだった。私はここで「だめだ」と言えば父親はあきらめる。だが工藤家をはじめとする茨城ファミリーのぎずなの深さを思った時、とどめの「だめだ」は言えず、「わかった引き受けるよ」と言った。

引き受けてみると高島淳子は足が速かった。長距離も短距離もだ。技術を教えるのはさほど難しくない。しかし、それも足が丈夫であってこそのことであって、それがなければ到達レベルには限度がある。私は彼女の足が丈夫だったので少しホッとした。だが、彼女を指導していくうちに気がかりなことがだんだん大きくなっていった。それは高島の身体がとつともなく堅かったことである。「こいつは用心しなければいつか大ケガするぞ」。それは現実になった。

年が明けて一月二日、正月合宿の初日に鶴鳴はいつも賞金大会をやる。フリースロー大会・一対一トーナメント・二対二トーナメントの三種別である。それぞれの部門で上位三人まではお年玉を貰える。高島は一対一の部門で準決勝まで勝ち残った。それを勝ち抜けば賞金獲得は確実である。彼女は頑張った。頑張りすぎてリバウンドボールを取って着地した瞬間に膝を捻った。私は選手がケガをした瞬間、どんなケガだろうとか、どの程度のケガだろうということは気にしない。ケガした瞬間の状況からケガの内容の最悪の状態を推測し、復帰までにどれくらいの期間を要するかを瞬時に計算する。私の計算では高島のケガは前十字靭帯損傷で復帰まで一年だった。

高島は九日に鏡視下手術を受けたが予想通り前十字靭帯部分断裂と半月板完全断裂だった。父親は「三年間鶴鳴でがんばってくれば……」と言ったけれど、遠く県外から預かった選手を鳴かず飛ばずで卒業させるわけにはいかない。

工藤早苗と高島淳子が登場したので、本校の選手ではないがこの年度に神村学園に進学した下田弥生のことについて述べておきたい。弥生は長崎市内の中学校でプレイをしていた。叔母は鶴鳴から共石に行った下田恵美子である。その関係で弥生も両親もプレイをするなら鶴鳴でやりたいと願っていた。ところがこの年は熊本から三人と新潟から二人、いずれも全国大会の舞台で活躍できる選手が入部する。通常の年なら喜んで弥生を迎えるところだがこの年はダメだった。第一章で述べたK県S中学校のG選手を断ったのと同じ理由である。

しかし、弥生は鶴鳴以外なら県内でプレイはしたくないという。だから私は鹿児島県の神村学園の進藤先生に弥生を引き受けてくれるよう頼んだ。弥生が神村学園在学中に鶴鳴と神村が公式戦で対戦したのは平成十二年二月一〇日、宮崎で行われた九州春季選手権の一回だけである。この時、鶴鳴の花田と神村の下田は互いにマッチアップ。勝負は下田の一本勝ちだった。技ありではなく一本である。花田にとっては屈辱だったろうし下田は溜飲を下げただろう。しかし、花田を取らずに下田を取っていたら全国大会でもっと上位に行けたかというそれはわからない。それはあくまで結果論である。

野田仁美は当初から鶴鳴を望んで受験した選手ではない。仁美の父親は野田四兄弟の末っ子である。この

四兄弟は全員バスケット選手で、しかも全員長崎のバスケット界を背負って立つガードだった。だから仁美はハイセイコーのこどものカツラノハイセイコなのである。私は仁美をミニバスケット時代から知っているし中学時代も知っている。仁美が所属しているチームはミニバスも中学も強かったしまとまりのよいチームだった。だが、小柄な選手が多かったので仁美を含む主力選手はほとんど公立進学校を受験した。

だが、仁美はその受験に失敗し、第二志望ですでに合格していた本校に入学することになった。私は手続きに来ていた仁美と母親に事務室の前でバツタリ会った。そして入学金は私が払った。仁美は選手としては特待生で受け入れる資質があるがそれは推薦入学でなければ適用されない。一般受験で入学するとどんなに優秀な選手であつても一般生扱いなのである。だから私は、それができないかわりにせめてもの感謝の意味で入学金を払ったのである。

その仁美は、二年生の六月八日の県高校総体で、後半起死回生のジャンプシュットを決めてインターハイ出場を鶴鳴にもたらししてくれたのにそのジャンプシュットを打った瞬間、ジャンプ力が強すぎて膝のサラを割ってしまった、インターハイには出られなかった。しかし、長期のリハビリを経て今度こそという時、また彼女を悲劇が襲う。そのことについては後述する。

私は選手を引き受ける時に「鳴かず飛ばずで卒業させることは絶対にならない」と思って引き受けるが、それでも不幸は襲ってくる。高校部活動の監督というのは選手の身体を鍛え、技術を教え込むだけでなく、このような不幸が襲ってきた時にその後始末をきちっとしてやれるか否かで真価を問われる。そういう意味では、高校部活動の監督は医師であり臨床心理士でもなければならぬ。

平成九年の夏、茨城の工先生からビデオが送られてきた。成井千夏のプレイを見て欲しいというのだ。千夏は送られてきたビデオからは彼女がペイント内で主にプレイをすることと、ジャンプ力があることと、不器用であることしか見て取れなかった。私はプレイだけでなく、そのプレイをした時の選手の表情まで見たのだがそれをビデオに求めるのは無理だ。

でも私は「引き受けます」と返事した。この年一七〇cm台でインサイドができる選手を獲得できる見通しが立っていなかったからだ。私が今でも覚えている彼女の最初の印象は「なに！このヤロー」だった。それは、生意気だとか生活態度が悪いなど、彼女の人間性が疑われるような悪質なものではない。テンネンなのだ。その場面は、スクリメージの最中に成井側のチームがリバウンドを取られて速効をしかけられた直後だった。成井が突然コートの中真ん中で解けた靴紐を結び始めたのである。彼女こそ、他の誰よりも急いで戻ってディフェンスリバウンド獲得に備えなければならぬ選手である

しかし彼女は、戻るのがめんどくさいとか疲れたから手を抜こうとしているのではなく、「あつ、靴紐が解けてる。結ばなきゃ」と思って素直に行動したのである。この年の年末、ウィンターカップを応援に来た母親から「どうですかうちのムスメは？」と聞かれた私は、「ウーン、例えてみれば昭和初期の電気製品だな」と答えた。

成井のように、身体的な素質は凄いが、不器用で感じ方が鈍い選手の育成には時間がかかる。その成井は前年の十一月中旬にリスフラン関節を捻挫した。リスフラン関節というのは足の甲にある関節で足首や手首のように動く関節ではないので、よほど医学に詳しい人でなければそこに関節があるということさえ気付かないような関節である。ここを傷めるというのは滅多になく、あるとすれば高いところから飛び降りて、たまたま飛び降りたところに石ころがあつてそれを踏んづけたような場合だ。成井のように方向を変えてダツシユした瞬間に傷めるというのは、よほどキック力が強い筋肉を持っていなければ起きない。バスケットとはどんな競技なのかとか人間とはいかにあるべきかというのを最も仕込まなければならない時期に長期療養を要するケガをしてしまった。痛かった。

しかし、前述のようにそれから一年経つた彼女は私から問いただされて涙ぐむほど感性が高くなっていた。ずっとあとのことになるが、彼女は卒業式の時に卒業生総代で答辞を読んだ。彼女の答辞は鶴鳴の歴史に残る逸品だというので今でも保存されている。

平成十一年十一月 県新人戦 優勝 スタメン 成井 宮原 花田 永石 重村姉  
野田 本人申告では二月中旬復帰予定。  
重村妹 十一月六日 足関節捻挫。

#### 【案内文書】

エントリーメンバーは地区新人戦と変わりません。ただし、個人々々に少し変化がありました。まずそのことからお知らせします。

高島 復活しましたが、地区新人戦終了後膝に少し水が溜まりました。練習を休ませると三日ぐらいで引きますが、まだ用心しながらの起用になります。

宮原 順調です。次のハードルは疲労との戦いです。出番が多くなれば疲れますから。

野田 やつとシュート練習を始めました。

花田 十七日。コートでの練習復帰を申し出てきましたが却下しました。十分な走り込みをしていなかったからです。ケガや病気にに対する認識が足りません。ケガや病気にに対する認識とは次の三つです。

ケガや病気をしないように自己管理をしつかりする。

もしケガや病気をしたら、それ以上悪くならないことを第一に考えた行動をとる。

復帰後再発しないための最善のリハビリを行う。

次にチーム全体のことについてお知らせします。

精神的などん底状態は抜け出しました。しかし、プレイ内容は本当に強い相手と対戦した時にも大丈夫だと言える状態にはなっていません。わかりやすい例を挙げますと成井と永石のシュートがそうです。先の団体では二〇得点と十五得点を挙げ、全国レベルの相手に対してのできればえとしてはまあまあですが、実際には安易さと甘さが目立つシュートがかなりあります。団体では上級生がプレイを組み立ててくれるのでこの得点を挙げられました。が、下級生だけのチームになった時にこれだけの得点を挙げられるかということと大丈夫とは言えないのです。他の選手も推して知るべしです。

精神面・技術面・戦術面・体力面それぞれにレベルアップが必要ですが、中でも重要且つ急務なのが精神面のレベルアップです。それも、一〇月十一日までは私一人がやきもきしていたのですが、地区新人戦の結果報告で述べたように「もう、二度とあんな思いはしたくない」と選手たちは思っているはずですから、それまでと同じような壁に突き当たっても解決しようとする気持ちが以前とは多少違うのではないかと思えます。早く「なんとかメドがつかました」と言えるようにしたいです。

#### 【結果報告】

注意して見る。

意識して行動する。

行動の結果を必ず自己採点する。

という習慣を身につけさせることだけにかかりつきりで八ヶ月。時には「あれっ？こいつら少しは変わってきたかな？」と思ったこともあります。が「だめだ、こいつらはわかるようにはならないかもしれない」と思ったことは数知れません。

今回の試合内容は数少ない前者の方の部類に入ります。練習したことが学習され、試合で実験することができ、実験結果が一人ひとりの身体に染み込んでいくのが手に取るようにわかりました。だから、そのことが効果的に現れている五人を集中的に試合に使い、他の選手の出番が少なくなってしまう。すみません。決して大差で勝ちたかったから選手を交代させなかったのではなく、今この時を逃しては効果的な学習のチャンスは次回いつ訪れるかわからないと思っただから必死だったのです。

何年ぶりかで味わう、いい試合のあとの爽快感がまだ少し残っています。しかし一方では「これが明日の練習からも続くだろうか？」という不安も相変わらず居座っています。本音を言えば明日からの練習が怖い

です。「夢なら醒めないで欲しい」そんな心境です。

道を歩むるは易く

道を定むるは難し

道を求むるは迷ひ多く

道を極むるに歳なし

柳生石舟斎

剣の道だけでなくバスケット道も同じ、いくら勉強してもどこまで行っても迷うことばかりで終点がありません。

追伸

近頃三年生相手のスクリメージ（試合形式の練習）がとても苦しくなってきました。スクリメージをやればやるほど新チームではなく三年生チームが巧くなるのです。特に国体以後の高橋彩は落ち着きを増し、プレイにキレが加わり、手に負えなくなってきました。小学生の頃からずっと、何をするにも他人のうしろに隠れて前に出てこようとしなかった高橋からは想像がつかみません。国体を契機に自分の過去を吹っ切る何かが高橋の中で起きたのでしょうか。こんな高橋を見てみると「若さというのはすばらしいものだなあ」とつくづく思います。何かきっかけがありさえすればこのように自分を一八〇度変えるエネルギーが出てくるんですから。

前述のように、新チームの選手には「なんとか光が見えてきたぞ」と思ってたホッとしたのもつかの間「え？また振り出し？」と、私は何度もがっかりさせられてきました。でも、それは高橋の過去二年間の過程に比べればはるかに上出来なんです。それなのに、私は最近いつも不機嫌で怒ってばかりいました。そんな私を諷めるために、神様が高橋の姿を借りて地上に舞い降りて来たのかもかもしれません。「君は体力と根気だけは自慢だったはずだろ？そうじゃなかったのかい？」神様はきつと私にそう言いたいんです。

## 二 SEGOND 骨折

平成十二年一月 九州高校春季二次予選 優勝 スタメン 成井 花田 永石 重村姉 重村妹

### 【案内文書】

県新人戦（十一月二〇～二二日於佐世保市）のあと、永石が「試合中に捻挫しました」と申し出てきました。私に隠して試合は続けたものの試合の翌日痛みが増したので申告したのです。そのあと三週間休ませました。

八月下旬に捻挫して九月のウィンターカップ予選を欠場した重村妹は十一月上旬に再び捻挫して県新人戦を欠場し、その後リハビリを続けていましたが十二月二十七日にまた捻挫しました。今回は軽症だったので練習は継続できたのですがお仕置きのために体育館から追放し、そのまま新潟に帰省させました。

グラウンドの四百メートルダッシュでふくらはぎの筋断裂を起こし、長期療養をしていた花田は県新人戦で復帰し、そのあと安定度が増してチームになくはならない存在になっていましたが、十二月十四日に捻挫して再び休養しなければならなくなりました。

私はケガをする選手と五反則退場する選手が大嫌いです。どんなにミスしても、どんなに調子が悪くても、コートに立ってさえいればそれを挽回するチャンスがあります。そのチャンスを自ら断ち切ってしまう選手を私は大嫌いなのです。ケガをするのは仕方がないという考え方は皮下脂肪が多いのは仕方がないという考え方と同じです。どちらの間違っています。自分に厳しくありさえすればどちらも意図的に減らせます。

十二月の決算報告をします。

成井はレパトリーが増えました。これまで彼女のディフェンスリバウンドとブロックショットとスリーポイントは驚異的でしたがそれに加えてディフェンスリバウンドを取ったあとに速攻のミドルマンができる

ようになったのです。私はつい二ヶ月前までは彼女がドリブルをするとボールがなくなるものだど覚悟していました。それが今では抑えに来る敵を蹴散らしてドリブルで進むのです。おまけに、チームでもっとも映像処理能力が劣っていた彼女が、最近では他の選手に指示語を出せるのです。しかも、指示が正しいのです。一年生の頃の彼女の判断力と理解力を評して私は「昭和初期の電気製品」と言いましたが撤回します。

重村姉は県新人戦でディフェンスの仕方がわかるようになりました。それがもう実力となって定着していません。加えてスリーポイントシュートが安定してきました。現在成井と並んでクレインズには絶対不可欠な選手です。

花田のリバウンドボール獲得はオフフェンスディフェンス両面で計り知れないほどチームに貢献しています。これも県新人戦後はつきりしてきました。まだ少し不安材料は残っていますが成井・重村姉とともにクレインズには不可欠の選手です。しかし、ここに名前が挙がった選手もそうでない選手も、全国の上位を狙うにはまだまだ足りないことだらけです。特に自覚という点で奮起してもらいたいと思います。

#### 【結果報告】

平成十一年一〇月十八日付けの地区新人戦結果報告抜粋。

九月五日、ウィンターカップ予選。九九、九%勝っている試合を負けにして出場権をなくしてからチームは下降線をたどる一途。そういう状態が約一ヶ月続き、一〇月九日から十一日の三連休に徳島城北との強化試合で復活の兆しが見えたところで成井に「私たちはどこをやっても負けるんじゃないかしら。そう思った時があっただろう」と言ったら成井は目に一杯涙を溜めてコックリしました。

平成十一年十一月二四日付けの県新人戦結果報告抜粋。

何年ぶりかで味わう、いい試合のあとの爽快感がまだ少し残っています

以上、九月以降のクレインズの経過報告です。その後、冬休みの前期と後期の強化合宿を経て、成井のレパートリーが増え、重村姉のディフェンスが良くなり、花田のリバウンドが強烈になり、「さあこれから本当に強くなるぞ」と思って臨んだ大会でしたが、せっかく二ヶ月がかりで貯めた財産を選手たちは自分の手でまき散らしてしまいました。

私がこれからやる仕事は、そのまき散らされた財産を一つひとつ拾い集め、元通りに復元することです。それはとても根気の要る仕事だと思います。でもそれも二ヶ月前と同じだとは思っていません。今回の作業は、選手の中に少なくとも二人ぐらいは私を手伝ってくれる選手がいますから。そしてまたこのようなことが起きたら、その時はまた手伝ってくれる選手が三人か四人に増えているはずです。

人づくりというのは、そうやってコツコツコツコツやっていくものだと思います。でも、私も人間ですからもしかしてグチのひとつもこぼしたくなる時があるかもしれません。その時は黙って聞いてください。

平成十二年二月 九州高校春季選手権 二回戦敗退 スタメン成井 花田 永石 重村姉 重村妹

#### 【案内文書】

一月二二日。宮原が風邪を引きました。それをずっと引きずっています。

一月二八日。花田が風邪を引きました。これもまだ引きずっています。

高島と野田は、やれるんですがまた古傷を傷めると怖いので、ハードなメニューから外しています。

というわけで、三年生相手にスクリメージができる選手は、成井・村川・永石・重村姉・重村妹の五人です。この時期は毎年、練習のできればよりも「今日は何人練習に出てくるだろうか？」という心配の方が先になります。一月十六日の試合以降、三年生の学年末テストが終わる一月三〇日までスクリメージは行わず部分練習主体の練習をしました。しかしそれも、メンバーが揃わないので充分ではありません。

一月三二日から三年生相手のスクリメージを再開しましたが、思い通りにならない事態が起きた時や、苦しい練習内容や苦しい場面に出くわすと愚かな本性をさらけ出してしまおうという状態は依然として続いています。そういう状態ですから、鹿児島での試合はどれくらいの成果を収めることができるのか、監督である私

自身が読めません。発見する 指摘する チェックする 選手の心に浸透させる、という作業がまだまだ続くのだと思います。

#### 【結果報告】

戦い終えてホツとしているのが実感です。

なぜなら、ひどい試合になるのではないかという不安を抱えながら臨んだ大会でしたが、そんなにひどい結果に終わらなくて済んだからです。監督の私が、選手も目を通す文書の中に選手の自信をなくさせるようなことを書いて大丈夫なのかと心配する人がいるかもしれませんが、私は逆にやっと自分の本当の本音が書けるところまで来たと思っています。

私はこの一年間、自分のチームがどこに向かっていくのかわからなくて苦しみ続けました。選手一人ひとりの長所を見極め、それをうまく組み合わせた仕上がりをイメージしながら訓練を重ねます。しかし、ある段階に来ると選手一人ひとりの弱点がじゃまをして前に進みません。そこでまた構想を練り直し、また訓練を始めます。しかしそれも、ある段階に来るとまた弱点がじゃまをしてダメになるのです。そんなことの繰り返しではつきりした構想が描けず、将来性が見えないまま臨んだのがこの大会でした。

私は、選手の向上心、自主性、責任感を全く信用していませんでした。しかし残り五一秒で四点負けている時の攻撃が失敗に終わって相手のスローインになった時、私が指示したわけでもないのにコート上の選手たちがすでにオールコートディフェンスの態勢をとっていたのでタイムアウトを取るのをやめ、「みずからこの判断ができただけでもヨシとしよう」と思って状況を見つめることにしました。

その夜一晩考えたことを試してみたくて、翌日鹿児島女子高校の体育館を借りて一日中合宿させてもらいました。その結果、重村姉をシューターにして、花田をポイントガードにして、重村妹をセカンドガードにするという構想がはつきりしました。その他、いくつかの改良点も考えつきましたがそれは次の試合で評価してください。ホツとしたというだけで不安要素がすべて払拭されたわけではありませんからまたプレーキがかかる時が何回かあるでしょうが、どうしようもない焦燥感はぬぐい去ることができました。

Y先生から「成井の出来が普段の一〇分の一しかありませんでしたねえ」と言われました。二つのチャージングを含む五反則退場。しかも総得点がわずか六点。Y先生の言うとおりです。しかし成井は昭和初期の電気製品から出発してようやく最近自分自身に注目するようになり、「私みたいな者でもお役に立てるかもしれない」と思い始めたのです。今回のミスの連発はワンランクアップの自分を作りたいたためのもがきが原因です。ですから私はまったく気にしていません。

花田のとてもないミスはもうひとりの花田が引き起こします。昔の彼女は自分の中に住み着いているもうひとりの自分に振り回されてパニックに陥るだけでしたが、今はそれと戦って「もうひとりの自分に勝たなければならない」と思い始めています。これから先も時々、もうひとりの自分にもみくちやにされる日があるでしょう。しかし私は、そんな彼女と心中するつもりで彼女の改良工事をするのがこのチームを救う唯一の道だと再確認しました。

高島はチームで一番の山崎バスケットの理解者です。理解力のある選手は考えすぎるために時期を逸したり場違いのプレイをすることがあります。それが怖くて今回は出番を作ってやれませんでした。すみません。

#### 【花田有衣】

花田をガードにコンバートした経緯について、あれから十三年経ったのでその経緯をもう話してもいいだろう。実は花田のガード的センスを買って私は花田をポイントガードにコンバートしたのではない。花田の身長は一七五cm。中学時代は当然インサイドプレイをメインにした選手だった。ところが中学時代から彼女はドリブルが大好きで、また器用だった。レッグスルー、ビハインドチェンジ、リバースターンなんでも来いだった。だから、試合中に観衆が「オーツ」とどよめくプレイもするが、それをやりすぎて自滅するプレイもまた数多く出る。両刃の剣だった。

もっとも困ったのが、試合中に彼女にボールが渡れば、相手を粉碎するかミスして自滅するまで他の四人



にはボールが回ってこないことだった。一年目、「お前一人で試合してるんじゃない！」と何度叱りつけたことか。しかし、九州春季選手権のあと、「待てよ？」と私は思った。花田をポイントガードにコンバートするアイデアが浮かんだのである。

彼女はボールにいつも触れていた。いろんな技を披露したい。だからボールを離さないのだ。そんなにボールを放したくなければエンドラインスローインからボールを運んでくるのを花田にすればよい。それなら誰よりも長くボールに触れていられるじゃないか。そう思ったのである。それは功を奏した。功を奏したというのは、動きがよくなったという意味ではなく、花田自身からも、他の四人からもストレスが減ったという意味である。

花田には、ポイントガードをやるのならば当然スリーポイントシュートも打たせなければならぬ。その手ほどもしたが、もともと彼女は器用だし、新しい技を覚えるのが好きだからすぐに覚えた。永石や重村姉に比べれば確率は低いけど、公式試合でも変なタイミングではなく、誰もが納得するタイミングで打てるようになり、時々入るようになった。

何より良かったのが、彼女がもともと得意としていたインサイドプレイである。重村姉妹がボールを運んでくるまでベースラインやショートコーナーあたりで待機していてタイミングを見てポイントエリアに飛び込むプレイならば相手のセンタープレイヤーがマッチアップするので窮屈なプレイになる場合があるが、ポイントガードとしてボールを運んでくれば彼女をマッチアップするのは相手のガードだから、一旦ゴールに向かってカットしてからシールすればミスマッチなので、有利な態勢でプレイを仕掛けられるのである。

このプレイがまた彼女の球離れをよくした。彼女をポイントガードにしたことよって何が良かったかというと、このことが最大の収穫だった。なお、ガードがパスアンドランから最終的にシールプレイに持ち込むというアイデアは、これを契機にそれからずっと私が採用している攻撃方法のひとつである。つまり、あまり動きの速くない長身選手にシールプレイを教えるよりも動きが速く技が多彩なガードやフォワードの選手にインサイドプレイを教え、長身者にはシールプレイからの得点よりもポイントエリア周辺でのシュートを確実に決めることを教える方が、オフENSEを教えるのに無駄な時間を使わず能率的だと思ったのである。

というわけで、本当の意味でのガードとして育てたわけではないけれど、花田は一七五cmのガードとして注目され、二〇〇一年（平成十三年）七月十二日、二一日、チェコのブルノで開催された世界女子ジュニア選手権大会（当時は、U十九とかU十六というカテゴリーはなかった）に日本代表選手として参加した。参加した選手は左記の十二人である。日本チームの成績は十一位だった。

大神雄子（桜花） 藤生喜代美（足羽） 田淵明日香（桜花） 花田有衣（鶴鳴）  
田中利佳（昭和学院） 谷川奈穂（静岡商） 畑恵理子（足羽） 長南真由美（山形商業）  
石岡美香（秋田経法） 重田麻希（桜花） 滝奈央（桜花） 森藤千晴（福井商業）

平成十二年四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 成井 永石 重村姉 重村妹 村川

#### 【案内文書】

紛失

#### 【結果報告】

大会五日前、宮原が左足首を捻挫しました。速攻で左ウイングを走っている時床に引っかかって。

大会四日前、花田が右足首を捻挫しました。リバウンドボールを取ったあとの着地時に。

大会前日、高島が右膝を痛めました。花田と同じくリバウンドボールを取ったあとの着地時でした。周辺に人は居ない、非接触の自損事故でした。私はその一部始終を見ていました。今でもその光景はリプレイできます。

高島は膝を曲げ、両膝を少し開いた状態で着地しましたが、やや右足に体重がかかりました。着地の瞬間右膝が内側にしなつてから外側に跳ね返りました。高島はウツと言ってその場に崩れ落ちました。私はこと

ばが出ませんでした。高島は昨年一月に膝を傷めて手術をしました。長いリハビリ生活に終止符を打ち、復帰する準備が進み、なんとかメドがついた矢先の出来事でした。

少し痛みが和らいだところで私は「またやったか、今度は完全に切れたかもしれないなあ」と言いました。初回のケガでは高島の前十字靭帯は全部切れたのではなく半分残っていたのです。しかし高島は顔をゆがめて「今度は反対の足です」と言いました。「エッ！」サーッと私の顔から血の気が引くのが自分でもわかりました。前回と同じ箇所を傷めたとは勘違いしていたのです。

高島は二四日にMRI検査をしますが、前十字靭帯が切れていることは間違いないでしょう。しかし手術はしません。手術すると高校時代に公式戦でコートに立ってるチャンスがなくなります。インターハイには間に合わないかもしれませんが、筋力強化のリハビリを重ねて十二月のウィンターカップではコートに立たせたいのです。(前回ケガした時も同じ内容の事を書きました)

慎子のコーチのキャシー・ベネットは大学時代にオールアメリカンに選ばれるほどの優秀な選手でしたが、彼女は大学二年生の時に右膝を、三年生の時に左膝を傷め、両方とも手術を受けました。だから彼女の現役生活は「オールアメリカンに選ばれる」ではなく「だろっ」のまま終わりました。しかし彼女はその後大学院でコーチ学を勉強し、今ではアメリカのバスケット関係者の間では知らない人がいないくらい有名なコーチになりました。キャシーはこれまで慎子のコーチとしてだけの存在でしたが、今は高島に勇気を与えてくれる大きな存在です。

十五日、高島を病院の前で降ろして診察を依頼し、私は他の選手とともにマイクロバスで佐世保に向かいました。高速道路に入る前、私はバスを止めてみんなに言いました。「ユカのことをみんな心配しているだろうから説明する。たぶんあいつのケガは前十字靭帯損傷で長期療養が必要だ。いいか、おまえたちは言ってみれば五体満足。ユカのことを思えばどんな辛いことだって耐えられるはず。練習が苦しいとか、ちっとも巧くないだとか、甘ったれたことを言うなよ」

選手たちが高島の分までがんばったのか、今回の試合は今期最高の出来でした。花田のポイントガードへのコンバート、重村のシューターへのコンバート、花田の特訓メニューの成果、それに付随した練習内容の効果、それらがことごとくいい面に出ました。

#### 【SEGOND骨折】

高島の膝は前十字靭帯断裂とSEGOND骨折(セゴン骨折と読み、Dは発音しない)の合併症だった。医師一人では判定が難しかったので最初の医師が自らセカンドオピニオンを依頼し、二人の医師に診てもらった。SEGOND骨折は、前十字靭帯を損傷することにより、脛骨が前外側に亜脱臼を起こして外側関節包の脛骨(スネの骨)付着部が剥離する骨折といわれている。後日彼女から聞いた話だが、彼女は激痛が走ったにもかかわらず「あー、ウィンターカップまであと何ヶ月なんだあ」と倒れながら思ったという。

それは私も同じだった。彼女は前年の正月に前十字靭帯を傷めて一年棒に振っている。それなのにまた前十字靭帯を傷めたらまた一年棒に振ることになる。そうなれば遠い茨城からやってきて山崎塾に入門した意味がない。高島はウィンターカップが終わってから手術することにし、装具を着けて練習を続け、国体とウィンターカップではなんとかコートに立てた。

平成十二年六月 県高校総体 優勝 スタメン 成井 花田 永石 重村姉 重村妹

#### 【案内文書】

まず、エントリー選手のことについて述べます。

県高校総体は高校スポーツ最大のイベントです。どこの学校も盛大な壮行会を催し、授業を休講にして大応援団を送り出すので友達がたくさん応援に来ます。ですからこの大会だけは、多くの友達が見てくれる晴れ舞台にできるだけ三年生を立てさせてやることにしています。しかし、出場権を取ったあとの九州大会やインターハイはこのエントリーではありません。実力本位です。

三月以降選手に言い続けてきたことばはいつも同じです。それは「技術練習や場面理解の分野で何か追加しなければならぬ内容は何ひとつない。足りないのは、勝ちたい、強くなりたい、巧くなりたい、と思ふ気持ちだけだ」です。確かにこの二ヶ月で強くなったとは思いますが、足りないのはメンタルな部分なので見た目では分からない場合があり、どの程度改善されたかを私は充分把握できていません。

壮行会の団旗授与は主将の高島が校長先生から受けます。しかし高島はまだ行進するのが無理なので、総合開会式の旗手は成井が務めます。成井は現在花粉症で苦しんでいますですが開会式までには治るでしょう。

追伸 新体操部の古賀先生から聞いた話です。

職員室前の廊下で一年生の生徒が二人立ち話をしていました。そこを私が通りかかりました。私が通り過ぎたあとで生徒の一人が「あの人誰だっけ？」と、もう一人の生徒に聞きました。聞かれた生徒は「ミヤーのおとうさんじゃない」と答えました。質問した生徒は「あ、そうか」と納得していたそうです。一年生の間では私よりミヤーの方が知名度が高いのです。頑張らなければ…。

### 【結果報告】

高校総体症候群という病気をご存知ですか？もともと、これは私が勝手に命名した病名ですが、新人戦、冬休み遠征、春休み遠征、五月の連休遠征、と確実に成長の足跡を残してきた選手が、高校総体ではまるで新入生のおどおどしながらプレイをし、それが他の選手に感染してしまう病気のことです。

平成七年の高校総体。決勝戦の相手は純心。スコアは五五対五〇の辛勝。このチームはその年の秋、本国体で名短と決勝を争ったチームですよ。そんなチームが、四ヶ月前はこんな有様だったのです。

平成八年は風軍団完成の年。この年のチームもインターハイでは名短と決勝を争い、歴史に残る試合をしました。そのチームが二ヶ月前の高校総体でひどい試合をしたのです。その時の試合結果報告の一部をここに再掲します。

大会三日目、決勝リーグの一発目でひどい試合をしたのです。特に工藤がダメでした。鶴鳴の選手がこんなに乱れるのが悔しくて悔しくて、私は選手交代をせずにスタメンで戦い続けました

高校総体の会場には選手を真剣にさせすぎてしまう魔物が潜んでいると私はいつも思っています。その魔物に翻弄され、大事なインターハイ出場の切符を落としてしまったのが昭和六一年の高校総体でした。しかもこの時は、第一シードでありながら決勝戦ではなく、一回戦で大村高校の小さなゾーンを攻めあぐんで負けてしまったのです。それを考えればひどい試合をしながらも取りこぼしをせず、ちゃんとインターハイ出場の切符を手にした今年の高校総体はヨシとしてやらなければならないでしょうか。

二月に花田をポイントガードにコンバートし、それに関わるプレイを組み立て、それに必要な技術や戦術を整理し、そのために必要な練習メニューを考え出し、約一ヶ月半練習したあと四月上旬と五月上旬に遠征をし、その遠征でかなりの成果を挙げ、「ヨシ、風軍団ほどまでにはならなくとも、来年といわず今年中に全国大会でも恥ずかしくない試合ができそうぞ」と密かに思って臨んだ高校総体だったのに、三ヶ月以上かかって積み上げてきた財産をすべて選手たちはどこかへ置き忘れてきてしまいました。真剣であればあるほどそうなってしまうのが高校総体症候群独特の症状です。

成井は人間的に成長し「なんとか先生の力になりたい」と思ってやっているのがよくわかります。なのに虫の居所が悪かったのか三日目に、私は成井に「自分のことさえ満足にできないヤツに心配して貰わなくても俺は一人でやっていける。余計な心配をせず、お前程度のヤツは自分のことを無我夢中でやってりゃいいんだ！」と毒づいてしまいました。コーチ歴三五年。五八歳。ベテランの域はとっくに過ぎてしまったはずなのにまだこんなでいたらくです。すみません。

### 三 膝蓋骨折

平成十二年六月 九州高校総体 三位 スタメン 成井 花田 永石 重村姉 重村妹

## 【案内文書】

神村学園 四月の春季選手権では優勝しました。久々のインターハイ出場かと思いましたが六月の高校総体では決勝リーグに残るも二位以内に入らず、九州大会にもインターハイにも行けません。

鹿児島女子 ベスト四の入り口で敗退。残るはウィンターカップ予選に賭けるだけです。

九州女子 五月中旬、地区予選で優勝したので県大会は第一シードでしたが結果は三位。二位までインターハイに出場できますが三位ではダメです。九州大会予選は二位だったので九州大会には出ます。

宇部女子 決勝戦、前半リードしながらも後半失速。インターハイ出場の切符を逃しました。

倉敷翠松 春は負けましたが高校総体はリベンジしてインターハイ出場を決めました。

徳島城北 新人戦で負け、春に巻き返し、今回はやられました。富田先生城北に赴任以来初黒星。

愛媛丹原 二週間前はドン底状態でしたが、歴戦の闘将瀬良先生は見事に立ち直らせ、優勝しました。

福井商業 「今年の夏は終わりました」……中池先生からのメッセージです。

以上、冬から春にかけて勉強しあつた仲間たちの結果です。惜しい試合を落としたチーム、直前のケガに泣かされたチーム、力以上のものを発揮したチームとさまざまです。高校総体が終わって間もない今、ホツとして気が振れているチーム、ブロック大会やインターハイに向けてさらに闘志を燃やしているチーム、敗戦のショックがまだくすぶっているチームと、これまたさまざまでしょう。

しかし、人が何を思っているように時は流れます。「ちょっと考える時間が欲しい」と思っている人のために立ち止まってはくれません。有頂天になっている人のために寄り道をしてくれたりもしません。時は誰にでも平等です。現実をしつかり見詰め、立ち止まらないで一秒でも有効に使おうとする者にのみ、次回幸せをつかむチャンスを与えてくれます。

平成二年同様、クレインズのうわさだけが先走っています。うわさに見合うチームにするには選手一人ひとりの弱点をまだまだ矯正しなければなりません。そのために一秒も無駄にはできません。闘いは延々と続きます。

## 【結果報告】

「今日の二試合、ユウ（成井）にプレゼントしてやってくれ。ユウは昨日の練習でもまだダメだ。もっといい場面を作って…」と考えているうちに機を逸してしまい、結局何もしないまま終わってしまった。こんなとこずつとそうだ。少しバスケットがわかりかけてきたからその足踏みんだけど、速くそれを抜け出させてやりたい。そのためには思いっきり乱暴な試合をするのがいいと思う。他人のことを一切気にせず、思いっきりわがままな試合をさせる。それを許してやって欲しい。だからといって、ユウにパスを回してシートを打たせてくれと言ってるんじゃないぞ。好きなようにやってください。後始末は私たちがやりますからという気持ちでやって欲しいと言いたんだ」

これは、初日の第一試合の前にみんなを集めて言ったことばです。成井は、少しわかりかけてきたけれどもそれに伴う技術がまだ自分のものになっていないのもどかしさと闘う日々が続いています。二年生の中には、自分に染みついていく精神面の脆さや幼稚さと真剣に向き合っ闘いを挑んでいる選手がいます。しかし、その選手たちとて努力に見合う結果がなかなか出ないので困惑しています。まだまだ自分をコントロールできずに公式戦では自分の持っているものの半分も出せずに打ちのめされている選手もいます。

そんな中で、野田だけは「痛くなったらハリ治療が効くから大丈夫だ」（ハリは私が打ちます）という安心材料が見つかったため、思い切ってプレイしています。唯一の光です。

そんな選手たちのさまざまな思いを乗せたクレインズ号は今インド洋真つ只中というところでしょうか。時には大きなうねりに飲み込まれ、姿が見えなくなったと思ったら突然大波に押し上げられて空中に放り出されます。

初日が終わったところで「優勝候補ですね。いよいよですね」と、期待を込めた人々の声を聞きました。それを聞く度に前述の事情を知っている私は「いはいえ、うちはシンガポールの天気と同じですから」と冗

談で答えました。シンガポールの天気は、五分前までは雲ひとつない快晴だったのに突然土砂降りの大雨になることがしばしばあります。

初日の出来は二日目の試合の前のアップの時も引き継がれていました。身体がよく動いているしシュートのタイミングもいいし確率もいいのです。ところが、試合が始まって五分もしないうちに早くもスコルが襲ってきました。相手に先手を取られるとまだ残り三五分もあるのに焦ってしまっただけでちぐはぐなプレイが続出。特にひどかったのが相手にセカンドショットをたくさん決められたことでした。ディフェンスを粘って相手のシュートを失敗させておきながら棒立ちになり、こぼれ球をほとんど取られてゴールされるのです。それは、ボックスアウトの練習をいくらやらせても解決しません。集中力の問題ですから。

「これを解決するには実験の積み重ねしかないな」試合後私はそう言いました。夏休みには強いチームの胸を借りてたくさん練習試合を試してみようと思っています。九州大会で優勝すればインターハイのシード権が得られたのですが、それがなくなっただけでどこまで勝ち進めれるかは組合せ次第になってしまいました。しかし、これから実験を積み重ねてたくましさや身につけ、インターハイにはうわさに追いつくチームを連れて行きたいと思っています。

平成十二年八月 インターハイ 二回戦敗退 スタメン 成井 花田 永石 重村姉 重村妹

#### 【案内文書】

七月四日、組合せのファックスが届きました。たぶん、四つのブロックの中でもっとも激戦区でしょう。最初の山から過去に全国優勝したことのある伝統校と次々対戦しなければなりません。私はこの組合せを見た瞬間「ヨシ」と言ってこぶしを握りました。「ヨシ」の意味は「いいブロックに入ったぞ」とか「高校になら勝てるぞ」の「ヨシ」ではありません。「これはクレインズの真価を問われる組合せだ。なんと少しでも桜花までたどり着くぞ」の「ヨシ」です。

昨年は二回戦で桜花に打ちのめされました。今年？桜花にはまだまだ手が届きません。だから、桜花と離れた組合せにまず感謝し、そこにたどり着くまでにどんなことが起ころうと凌いで勝ち上がらなければならぬのです。

九州大会で三位にしかなれなかったのに大言壮語と思われるかもしれませんが、私は九州大会の敗戦をクレインズの真の力とは思っていません。私が選手の力を発揮させてやれなかったのだと思っています。確かに、クレインズの選手たちはちょっとした出来事に翻弄されてしまう脆さを相変わらず持ち続けています。九州大会はそれが私の采配の範疇を越えてしまったのでどうにもできませんでしたが、インターハイではそれをなんとか私の采配で裁ける範囲にとどめさせて戦わせたいと思っています。もしそんな戦いができるなら、見ている人をアツと思わせるものを一人ひとりが持っているのですから。

#### 【結果報告】

昭和学院に勝ったのならベスト四までは絶対コマを進めなければなりません。昭和学院の鈴木先生には申し訳ないことをしてしまいました。東京成徳との試合が終わったあと審判の丹後氏から「一〇番、今日はどこか身体の具合が悪かったんですか？」と、ことばをかけられました。一〇番というのは花田のことです。丹後氏は初戦の昭和学院戦を見ていたのです。

そう言われた花田はスコア上（出場時間三六分得点一一反則二）では前日の昭和学院戦よりも活躍しています。だからスコアしか見ない人には「なぜそんなこと言われるの？」と思う人がたくさんいると思います。しかし、コートサイドで見ていた人は丹後氏の言うことがよくわかるはずですよ。

私が最初の選手交代でベンチに下げた花田に言ったことばは「以前のお前に戻っているぞ。しっかりしろ！」です。表情が能面のように戦いの場に臨んでいる精神状態ではありません。かといって、あがっているとか怖じ気づいているというのでもありません。持病が出たのです。その持病も以前は「こういう精神状態になったら手のほどこしようがない」だったのに、今回は時々自分でムチを入れてこれだけのスコアを残し

てくれました。時々ムチを入れてこれだけのスコアですから終始充実した気持ちで戦ってくれた前日の活躍がいかにすごかったか想像してください。

だから花田は、初日の活躍によって日本代表ジュニアチームの十九名の候補に選ばれ九月中旬の合宿に参加します。そこで七名がふるい落とされて十二名になり、その十二名で十二月下旬にインドで開催されるアジアジュニア選手権に出場するのですが、ふるい落とされる七名になるのか十二名の中に入るのかは花田次第です。今日の花田なら選ばれません。

さて、花田の変調が永石にも波及しました。棒立ちのままのシュートやタイミングのよくないシュートを何回も打ってしまったのです。前日の昭和学院戦（出場時間三七分得点十九反則四）とはこれまた別人のような（出場時間二三分得点四反則〇）永石でした。久しぶりに出た持病です。

二人の持病はこのところずっとなりを潜めていました。特に七月下旬の山口遠征ではこの二人は本当に心強い存在でした。しかもそれがインターハイ直前になっても変わらないのです。私はインターハイ出発の前夜花田永石両名の実家に電話をかけようと思ってダイヤルを回しました。「今度こそやってくれるかもしれない」そんなことを言いたかったからです。でも、ダイヤルを回し終わらないうちに切ってしまいました。「捕らぬ狸の皮算用」ということばが急に頭をよぎったからです。結果はそのとおりになってしまいました。崩れたとはいえ檜舞台でしかも強豪昭和学院相手にちゃんと仕事のできたのですから一歩前進と見てやらなければなりません。

重村姉妹は両日とも安定した仕事をしてくれました。特に典子は、以前から困った時に頼りになる選手だとは思っていました。今回さらに信頼度が高くなりました。安紀は山口合宿の時少し成長したかな？と思ったのですが、それが間違いなかったということを実証してくれました。

今回特筆すべきは村川です。これまでの村川は出場しても時間つなぎだけでした。しかし今回の村川は出場した時間しっかり仕事をしてくれたのです。

というわけで、「こつなつたら持病がチーム全体に感染して手のほどこしようがなくなる」だったのが、部分感染にとどまったり、全く感染しなかった選手もいたり、悔しさは拭えないながらも飛躍の前兆と見てやらなければならぬと思います。

成井は人間的に成長した分だけ今まで見えなかったものが少しだけ見えるようになり、それがかえって本人を邪魔し続けています。まったく見えなければ迷わなくても済むのですが、少しは見えるのでかえって半端なのです。でも、成長したからパフォーマンスが低下するなんてバカげていますから彼女のプレイを選択枝の少ないプレイに整理し直して、今後の試合に臨ませたいと思います。

#### 【野田仁美】

インターハイの一ヶ月半前に行われた九州大会の報告書に野田だけが思い切りのいいプレイをしていたと書いた。三試合の出場時間は十七分、二十六分、十八分である。が、インターハイでは二試合とも出場時間はゼロだった。九州大会後またケガをしたのだ。それは七月上旬、期末テストが終わって本格的な練習に入ってチームを二組に分け、スクリメージをしている時だった。花田がディフェンスリバウンドのボールを取ったが花田の目の前にドカーンと跳び込んできた選手がいる。それは空振りに終わったが空振りした手の高さは花田と同じ高さだった。一六〇cmしかない野田だった。花田の身長は一七五cmでしかもジャンプ力がある。私はリバウンドボールを取った花田には目もくれず空振りジャンプのあと着地した野田から目を離さず、「おまえ、またやっただろ」と言った。野田の顔は苦痛に歪んでいた。

野田は前年、高校総体で起死回生のジャンプシュートを決めた時に膝のササを割り、その後長いリハビリを経てようやく先の九州大会で公式戦に出られるようになった。その九州大会で本来の動きを取り戻した野田を見て私は「次のインターハイこそランに二年分暴れさせられるぞ」と思った。野田も自分の九州大会の出来から「インターハイこそ」と張り切っていたのだらうと思う。野田の苦痛に歪んだ顔を見ながら私の頭の中では高島が二度目のケガをした時と同じ思いがよぎった。

野田の膝は、X線画像で見たら前年傷めたサラにくつきりと骨折線が残っていたがそのまま保存療法でまた様子を見ることにした。もちろん、インターハイには連れて行ったが試合には出せない。夏休みはそのままだ様子を見たが、くさび形の骨折線は改善されておらず、このまま待たせていても繋がらないということで九月六日に手術をすることにした。その手術とは、膝蓋骨を一周ぐるっとワイヤーで巻いて骨折部位に圧をかけて繋がるのを早くしようとする手術だ。イメージが湧かない人にわかりやすく言えば、ロールキャベツの中身が崩れて外にはみ出さないように、糸でぐるっと巻くのと同じ理屈だ。

それにしても、それにしても、神様はいじわるだ。高島も在学中に二度大ケガをしたが最初のケガはお年玉欲しさに力みすぎた自損事故だから仕方がない。しかし野田の最初のケガはクレインズにインターハイの出場権をもたらしてくれたブレイが素でケガをした。それなのに神様はまた野田に試練を与えた。野田がまた試練に耐えなければならぬようなどんな悪いことをしたというのだ。

#### 【投書】

平成十二年八月一〇日。十二時〜十三時投函。長崎中央郵便局管内。差出人不明。

投書が郵送された。以下、原文のまま紹介する。

私は山崎バスケットが好きで、以前からことあるごとに、試合に出かけています。今年も期待しつつ、長崎・熊本と応援に行きました。そして、今回のインターハイの結果を新聞で見て、「やっぱりか」と肩を落しました。

なぜこのように言うか・・・数年前までのチームは楽しみがありました。見ていても面白く、ぞくぞくしながら見ていました。ところが、ここ二〜三年山崎バスケットは見られません。ディフェンスはしない、シュートブロックばかり狙っている、オフENSEは何かしてくれろと思っても外角のスリーポイントのみ、どんな相手にもまったくいっしょ。先生の試合結果報告を読んでも、選手に対しての愚痴のようなことばかりが多くがっかりです。

もつと残念に思うのはアメリカ遠征です。高いお金を使って本当に効果があったのですか？ 家族は大変の様ですよ。先生には言えないと思いますが、もうひとつ言わせてもらえば、今回のアメリカチームの受け入れ、本当に選手が喜んでいでしょうか。先生の見栄・独りよがり・大野のためだけ等ではないですか。しかも金を取ってクリニクをする。それをアメリカチームの経費の補助に充てる。なんたることか！

先生の周りの人は本当に本気で協力しようと思っているのでしょうか？ 疑問です。私もその内のひとりです。アメリカチームの受け入れは県・市バスケットボール協会の人はどれだけの人が楽しみにしてみんな協力体制を作っているでしょうか。作っていなければ絶対に作るべきだと思えます。なぜ作れないのでしょうか。最後にもう一回、先生の最高のチームを創ってください。期待しています。先生、初心に戻ってください。お願いします。自分を見直してください。山崎バスケットのファンより。

四 村八分

平成十二年八月 九州国体二位 鶴鳴八 長商二 純心一 佐西一

スタメン成井(鶴) 花田(鶴) 永石(鶴) 重村姉(鶴) 重村妹(鶴)

#### 【案内文書】

七月二日から二四日まで山口遠征をしました。対戦相手は山口少年女子、山口成年女子、丹原高校(愛媛)です。到着直後の試合は山口少年女子に負けました。しかし、移動の疲れが取れた午後から最終日の午前中まで、山口成年女子に負けた以外はすべて負け無し。最終日の午後、山口成年女子に二敗してしまいました。田嶋の捻挫や木下の腰痛でローテーションが苦しくなったので仕方がありません。

インターハイ後はWJBL選抜やエバンズビル大学とスクリメージを数回やらせてもらいました。エバンズビル大学には二連敗でしたがWJBL選抜には二勝一敗と勝ち越しました。というわけで、今夏の強化練

習は大いに成果を挙げました。あとは十九日と二〇日の二日間、長崎成年女子と強化試合をしてその後福岡遠征をし、磨きをかけて大分に乗り込みます。

今年の春から夏にかけて、長崎の高校スポーツ界は素晴らしい成果を収めています。ですからバスケットボール少年女子は国体出場を果たすだけでは評価されません。そのことを踏まえて万全の準備をして九州国体に臨みたいと思います。

今年から組合せが、三ブロックに分けた予選リーグではなく二ブロックに分けた予選リーグという方式に変わりました。組合せはEブロックが熊本・大分・長崎・佐賀、Fブロックが福岡・沖縄・宮崎・鹿児島でそれぞれのブロックでリーグ戦を行います。今年は九州の出場枠が二なので、ブロックで一位になれば国体には出場できます。優勝決定戦は行いますが、今年のインターハイで九州のチームはベスト八に入っていないので一位出場でも二位出場でも本国体のシード権には関係ありません。

#### 【結果報告】

九州国体や本国体の試合はものすごい重圧で私にのしかかってきます。いつもそうです。インターハイやウィンターカップは学校を背負って戦います。しかし国体は県を背負って戦わなければなりません。しかも私は、県協会の役職の立場上体育協会や体育保健課に出入りしてきた回数が多く、その中で働く職員の方々の動きや表情をいつも見ているだけになおさら重圧を感じるのです。

それに加えて今年の長崎県の高校スポーツ界の活躍はすさまじいものがあります。ですからそれに乗り遅れたくないという重圧も感じていました。そういうわけで熊本を破ってEブロック優勝を果たし、出場権を勝ち取った瞬間は全身の力が抜けてしまうほどホツとしました。

Fブロック優勝の福岡との優勝決定戦後半は、長崎の選手たちの思考力と体力が限界に近づいていました。それでも勝つチャンスはありました。試合の途中「わずか五分持ち堪えれば勝てる」という私の思いが選手に伝わらない歯がゆさから、タイムアウトでベンチに戻ってきた選手たちに「水なんか飲むな！きさまらに水を飲む資格はない！」と毒づいてしまいました。大声で叱咤することはあっても、こんな仕打ちをするのはこの二〇年記憶にありません。バカなことを言ってしまったと思っています。

ひどい仕打ちをしましたが、選手たちには国体は母校だけでなくいろんな人の思いが詰まっているのだということをわかる選手に育って欲しいと思っています。「県の役員は国体の点数のことしか頭にない」などと批判めいたことばを時々耳にすることがありますが、夜の一〇時に県庁の体育保健課に直通電話をかけてみてください。必ず誰かが出ます。そんな時間まで彼等は毎日仕事をしているのです。何のために？県民一人ひとりに活力を与えるためにです。

選手たちにそんなことまでわかるようになれとは言いません。しかし、頭を上げてもう少し遠くまで見ようとする人々の動きや思いが見えてくるようになります。本国体までもっともっと鍛錬を重ね、人のさまざまな思いがわかって戦えるチームに育て上げ、富山に乗り込みたいと思います。

平成十二年一〇月 本国体二位 鶴鳴八 長商二 純心一 佐西一

スタメン成井(鶴) 花田(鶴) 永石(鶴) 重村姉(鶴) 重村妹(鶴)

#### 【案内文書】

七月下旬、インターハイ直前でしたが国体チームで山口遠征をしました。この遠征で私は、国体チームの監督としてもクレインズの監督としても「今年はベスト八以上に食い込めるかもしれないぞ」という手応えを感じました。しかしインターハイでは国体チームの主力部隊であるクレインズは二回戦で東京成徳に負けてしまいました。それから私は鬼になりました。九州国体では応援の四人(木下長商・田嶋長商・上田純心・奥川佐西)を加えてかろうじて本国体の出場権を得たものの、試合内容はまったくダメ。それからまた私はさらに強烈な鬼になりました。

このあと、一〇月七・八・九の三連休の山口遠征で、山口少年女子・福岡少年女子・小林高校と強化試合



をしてから富山に乗り込みます。この強化合宿でも私はさらに磨きをかけた鬼になるでしょう。どれくらい鬼になるかというと、「これ以上追い込むと潰れるかもしれない」を基準にした鬼ではなく、「これくらいにならないければ全国ベスト四は狙えない」を基準にした鬼です。この基準は決して下げません。なぜなら、いつものことですが出発の日から試合終了までの私は、これ以上の味方はいないという監督に変身するんですから。

九州国体以後強化した内容は、一対一のディフェンスとチームでのリバウンド、それに四人の応援組をひとりずつバラバラに使っても充分個々の力を引き出せるオフenseシステムの構築です。

#### 【結果報告】

少年女子チームの監督として

惜しくも優勝を逃しました。でも悔しくはありません。天皇杯二位の一翼を担うことができたという安堵感と、選手たちに「本当によくやってくれた」と言ってやりたい気持ちでいっぱいです。

携帯メールをたくさんいただきました。電報もたくさんいただきました。浦町の方々は家族同様の心温まるもてなしを受けました。長崎少年女子チームは多くの方々に愛されていると実感しました。それが私たちの勇気を生み出した原動力になっていることは間違いありません。本当にありがとうございます。

クレインズの監督として

主力部隊であるクレインズの選手たちは、夏休み中盤までは精神面の脆さを罵倒され続けていました。私はそれを治すために二ヶ月間鬼になりました。このことは国体の案内文書にも書きました。私は本当に「このままのチームならいっそ潰れてしまってもかまわない」と思って毎日毎日選手を追いつめました。が、今回このような成果を挙げられたのはこの二ヶ月間の強化だけが実つたのではなく、過去二年間の積み重ねがこの二ヶ月間の拍車でピッチを上げ、丁度国体に間に合ったのだと私は思っています。

もうひとつ注目しなければなりません。それは彼女たちの力量の査定です。成長とか進歩というものがなければこのような成果を収められないのですが、私は彼女たちの成長や進歩を、内容の充実した成長や進歩ではなく、少し無理だったり無謀だったりしても成功させてしまう力がついたのだと認識しています。

と、こう言えば彼女たちの努力にケチをつけるように聞こえるかもしれませんが決してそうではありません。弱虫泣き虫だった彼女たちがここまで成長したのは本当に嬉しいです。ですが、試合の流れを冷静に分析すると、「そこはシュートを打つ場面じゃないだろう」とか、「そこはドライブを警戒する場面だろう」というようなことがまだまだ目に付くのです。

私はクレインズが本当の本物になるのは今日からだと思っています。これまでは、練習試合では強くても本大会ではなかなか結果が出せなかったので選手も不安が拭いきれなかったでしょう。それが今回の試合で「未熟さは残っているもののこれだけの成果を収めることができた」と実感できたはずですから、「一人ひとりが自分の弱点を克服すれば今度こそ本物になれる」と誰もが思ったはずですよ。そういう意味で、来年の宮城国体の優勝を狙った強化がもう始まったと私は思っています。

一言だけ泣き言を言わせてください。

決勝戦、花田と重村姉がスタミナ切れで集中力が鈍ってきた時「ああ、野田が健在だったらここで休ませることができると…」と思いました。ただでさえ他県に比べて層の薄い長崎チームなので、来年の国体は絶対にケガ人を出さないように万全を期して優勝を狙いたいと重なります。

追伸

来年も主力選手はそのまま残ります。だから来年は今年よりも安定した力が発揮できると思います。しかし、クレインズがどんなに強くなっても、私は鶴鳴単独で国体に出る気はありません。国体はみんなの力が結集しなければ勝ち進めないのです。みなさんの総力で来年も頑張りましょう。

【後日談一 選手起用】

私が監督をした国体で、長崎市外の学校から国体チームに選んだのは二人だけである。昭和五六年の原田五月（対馬豊玉高校）と今年度の奥川美里（佐世保西高校）だ。なぜ国体選手が長崎市外のチームから選出されなかったかという点、長崎市内のチームと他都市のチームとは力の差がありすぎて国体選手として選ぶにふさわしい選手がいなかったからである。

原田五月は、昭和五五年の県高校総体でベスト四に入った対馬の豊玉高校の選手である。離島の高校が県高校総体でベスト四に入るのは初めてである。離島から初のベスト四入りしたご褒美と、原田の突出した身体能力を買って私は彼女を国体選手に選んだ。すると原田は、「この子に国体選手に選ばれるほどの力があるのなら、夏休みだけの強化練習だけでなく、鶴鳴に転校して本格的にやらせたい」と家族会議で決まり、高校総体後さつさと鶴鳴に転校してきた。このことは私の最初の著書『チームを創る』で詳しく述べている。

奥川が所属する佐世保西高校は県立の進学校である。ベスト四に入ったので国体までプレイをする意志があるかどうかを尋ねたらあるという。それで入れた。本当はそこに鶴鳴の野田が入る予定だった。野田は前に述べたように七月中旬に再びサラの骨を割ってしまった。夏休みいっぱい保存療法で様子を見ていたが骨折線がなかなか消えないので、このままでは年末のウィンターカップにも出られないから九月六日に手術することにした。それから一ヶ月半後の国体にはとも出せない。

奥川は幸運に恵まれた。これまで長崎市外から県高校総体に入ったのは平成七年の西海学園と島原高校、平成八年の佐世保商業と島原高校の三校である。だがこの三校からは国体選手は選ばれていない。指名されても大学受験勉強のために国体までできないという選手がいたり、チームはベスト四に入ったけれど個人的には選抜される資質の選手がいなかったり、主力部隊の鶴鳴との力の差があまりにもありすぎたなどの理由による。

もうひとつ、奥川が幸運だったのは私の考えが変わったからである。実は平成十二年度の鶴鳴は平成七年度と八年度同様非常に強かった。だから国体に向けての補強選手など要らない。だが、鶴鳴単独で行っても全国のトップレベルのチームと戦う時の主力部隊はせいぜい上から八人ぐらいしか使えず、下級生の出番なにかない。それならば、他の四人は鶴鳴の下級生ではなく他校のがんばった上級生を入れることにしようと思うようになった。そこにちょうど奥川が居たたのである。

選手起用についてはもう一つ話しておかなければならないことがある。鶴鳴の三年生からエントリーしたのは高島・成井・宮原の三人である。本当は四人なのだが前述の理由で野田が外れている。高島は四月に膝を傷めたがさいわい前十字靭帯損傷ではなくSEGOND骨折だったので手術もせず、装具装着でコートには立てるようにになっていた。だが全国大会の強豪相手に出せるほどには回復していない。しかし私は、国体の準々決勝以降はすべての試合で必ず高島をスタメンに出した。だから本来のスタメンである重村典子はベンチスタートである。

彼女の卒業後の希望進路は国立大学の教育学部である。教師になってさらにバスケットボールの指導者になりたいと強く思っている。彼女は学習成績優秀でオール五に近いから普通にセンター試験を受けても合格するかもしれないが、スポーツ推薦制度で受験出来るならそれに越したことはない。スポーツ推薦制度で受けられる大学はどこも、チームスポーツは全国大会のベスト八以上で本人がその試合に出場していて、学習成績が四・〇以上であることまたは個人的に日本代表ジュニアに選ばれていることと、まるで話し合っただけのような基準を設けている。

彼女は、四月に膝を負傷してからずっとリハビリを続け、六月には少しプレイができるようになっていたが六月中旬に再度傷めてまたリハビリ生活に時間を取られた。だからインターハイの時にはかなり良くなっていたものの試合には出ていない。そういう事情で、彼女が全国大会のベスト八以上の大会のコートに立てる可能性はこの国体しかない。この後行われるウィンターカップにはもっと動けるようになってくるかもしれないが、鶴鳴がウィンターカップで必ずベスト八以上に入るといふ保障はないのである。

だが、彼女をずっと試合に出していると試合は危ない。だからせいぜい試合開始から三分とか四分ぐらい

で重村典子が登場する。だが、公式スコアシートにはスタメンで出場という証拠の×印が高島の名前の左側に付く。しかも全国大会の決勝戦スタメンである。推薦資料の競技成績の判定はこれで百点ゲットである。

選手起用についてはもうひとつ同じような話がある、それは平成七年の福島国体の時のことである。この時も長崎少年女子は決勝戦まで勝ち進んだ。この時の本当のスタメンは櫻田 野添 工藤 肘井 大野 だったが、高島と同じ理由で三年生の武藤をスタメンで出し、大野はベンチスタートにした。富山国体の時の高島は事件が起きないうちに早く引つ込めたが、福島国体の武藤はベスト八の入り口で第三シードの愛媛と対戦し、勝敗ががどっちに転ぶがわからない状態の時、相手のゾーンディフェンスの隙間を破ってフリースローライン付近から際どいジャンプシュットを決めて勝利の女神を長崎に呼び寄せてくれた。その場面は今でも鮮明に思い出すことができる。

【後日談二 村八分】

国体が開催されたのは富山県東礪波郡福野町（現在は市町村合併により南砺市福野町）だった。内陸の方に目をやると北アルプスの山々が壮大なスケールで眼前に広がる。到着後の感想は、「ウワーツ。凄い景色だ」と「人が少な〜い」だった。

私たちの宿舎は福野町浦町の浦町会館という公民館だった。国体で民泊したのは、昭和五四年の宮崎国体（延岡市）と、平成元年の北海道国体（恵庭市）と、今回の富山国体（福野町）の三回である。三回の民泊はどれもこれ以上のもてなしはないという歓待を受けた。

宮崎国体の時はお名前を忘れたが個人のお宅だった。ご主人は「ぼてぢゅう」というのれんのお好み焼き屋をされていた。だからお好み焼きは食べ放題だし、県から指定された献立を無視して毎日のように鮎が食卓に乗った。ご主人の話では先代貴ノ花が巡業の時はここを定宿にしていたらしく、貴ノ花のサインや手形やグッツがたくさん棚に飾られていた。

北海道国体の時は数件の家に分散した民泊だったが食事は毎回地区の公民館で摂った。到着した日は長崎県人会の人が至れり尽くせりの世話をしてくれた。長崎県人会と言ったが、北海道という所は土地の人よりも本土から渡って来た人たちの方が多い土地もあって 県人会などというのが多く、例えば広島町というのは広島島から渡ってきた人達が多く住み着いた町だと聞いた。参ったのは蒸かしたジャガイモの山と茹でたトウモロコシの山である。北海道の特産ということは知っているけれど、あれだけ積み上げられると腰を引いてしまつ。

公民館に集まって選手たちと会話をしていると、お世話になつている家にはどこも玄関が二つあるということがわかった。土地の人に聞いてみると、北海道の冬は玄関のドアが一つだと開けた瞬間に雪と風が部屋の中に入り込んでくるから二重にしなければ住めないのだそうだ。なるほど。

富山国体の時は宿泊も食事も公民館だった。地区の人たちがお世話をしにくるのだがどの顔にも「浦町はよかった」と思つて帰つて貰いたいと書いてある。開会式のあと、折角ユネスコの世界遺産に登録されている五箇山と白川郷の近くまで来たんだから行つてみようというので国道一五六号線をうねうねとマイクロバスで登つて合掌造りの集落を見に行った。国道一五六号線は庄川の谷の斜面を削つて作った道で、昔は道幅が狭く大変危険だったため、路線番号にかけてイチコ口線（谷に落ちたらいちこころ）と言われたらしい。

白川郷にある和田さんの家は立派な合掌造りの家で世界遺産に登録されている。「こんにちわ〜」と云つて家の中に入り、二階に上がらせてもらった。「いちぢしや〜い」と云つて迎えてくれた和田さんを私たちはこの家の管理人だと思つていたが、その家の持ち主であり、実際にそこで生活しているのだとあとで聞いておどろいた。

五箇山には三笑楽酒造という造り酒屋があつて、土地の人からこの酒をおみやげに買っていけば酒好きのひとから絶対喜ばれると聞いて数本買って帰つたが、土地の人から一級とか特級ではなく二級を買つて帰れと言われたのは驚いた。なぜかと聞くと、一級とか特級の値段は殆ど税金に持つて行かれるお金で、酒の本当の味は二級の方が旨いと言われた。酒のことはまったくわからないがそんなものかと思つて買って帰

ったが、長崎の酒好きの人におみやげであげたら「これはうまい！」と言われてそれ以来インターネットで注文して毎年取り寄せている。

試合の応援がすごかった。毎試合浦町の人たちが応援に来てくれたが、決勝戦は地元富山との戦いである。完全アウェイ戦だ。しかし、長崎少年女子のベンチの真ん前の応援席の集団は浦町の人たちで、長崎が得点するたびに「ワーツ」と歓声をあげる。私はハーフタイムに応援団席に行き「そんなことしてたら国体が終わったあと村八分に遭うよ」と言ったら返ってきた返事は「その時は町民税を払いませんから、ハハハ」だった。

平成十二年九月 ウインターカップ予選 優勝 スタメン 成井 花田 永石 重村姉 重村妹

#### 【案内文書】

インターハイ後、成井、永石、村川、花田の四人だけの特訓に明け暮れています。前の三人と花田の特訓の内容は違います。前の三人の特訓内容はハーフコート三対三です。この三人がずっとオフェンスをします。ディフェンスは宮原、花田、紀子、安紀の四人が交替でやります。

なぜこの三人なのか、それはこの三人には共通して、迷い・躊躇・焦り・恐れ・気後れ等のパフォーマンスを低下させる要素がまだ残っているからです。その原因は依存心が強いからだけではありません。責任感が強すぎてそうなってしまっている選手もいます。

いずれにしろ、この三人でしか攻撃ができないのであればこの三人のうちの誰かが勝負に決着をつける時の主役にならなければなりません。主役になるのは本当に辛いものです。責任がグツとのしかかってきますから。その辛さを乗り越えて主役を演じさせるにはこの時期しかないと思ってこの三人を特訓しています。

この時期を逃せない理由は、永石の昭和学院戦の活躍や村川のしっかりしたプレイが大きな公式戦で始めて出たからです。「私でもなんとかやれる」という思いが鮮明なうちに、同居している躊躇や気後れを排除したいからです。

この練習が始まって間もなく村川が過換気症候群でしばらく参ってしまいました。食事のどを通らず、午前中の練習の途中に必ず症状が出て午後の練習ができないという日が何日か続きました。それも今ではみんなと同じように最後までやれるようになっていきます。第一関門を突破したのだと思います。

花田の特訓は、半年前に花田専用として採用したオールコート三対四の練習を復活させました。昭和学院戦でのすばらしい活躍と東京成徳戦での放心のギャップを埋めるためです。この練習での花田は、三対三の練習のように三人のうちの一人が必ず主役になるのは違い、毎回主役にならなければなりません。その練習が一時間続くのです。当然花田は途中でキレそうになります。その時の自分をコントロールできるようにするのが花田特訓の狙いです。

夏休みが終わった時、本当に努力した者だけが幸せをつかむことができるんだということがわかる人間に成長し、他人の苦しみがわかり、他人を幸せにしてやりたいと思う人間になっていることを願っています。

#### 【結果報告】

九州国体の重村典子は冴えませんでした。蓄積疲労です。本当は九州国体終了後三日ぐらいは休養させなければなりません。このウインターカップ予選がすぐ控えているので休ませた後崩れるのが怖く、二八日に一日休養させただけで練習を続けました。

三十一日の朝、典子の顔はむくんでいました。「ドン、体育教官室で寝ておけ」と私は言い、残りのメンバーで練習をしました。九月一日は始業式。この日も典子は体育教官室で休養させました。しかし、昨日までは普通だったのにこの日は妹の安紀も顔がむくんでいます。「お前もか？」と私は安紀に聞きました。「いえ、昨夜寮のテレビでアルマゲドンを見て感激して泣いたので目が腫れてしまいました」と安紀は言います。「バカヤロウー」と言いながら、あまりのバカバカしさに私は笑ってしまいました。蓄積疲労で重い雰囲気の中、安紀のテンネンが仲間の笑いを誘い、一服の清涼剤になってしまいました。

ともあれ、これで全国大会出場権のかかった大事な予選はすべて終わりました。本当にホッとしました。本音を言えば明日から本当の夏休みが欲しいです。

クレインズが全国大会で強い相手と互角に戦えるチームになるためにはまだまだ鍛え込まなければならぬ分野がたくさんあります。ビデオチェックすると、浮き足立っている。読みが浅い。集中力が続かない。ちよつとしたことで動揺する、の四点はどの試合でも必ず目につきます。これまでもずつとこの点については改良を試みてきましたが、この改良工事は根気以外にはありません。見ていただいた方に「鶴鳴らしくなつたね」と言ってもらえるよう、これから根気強く指導していきます。よろしく願います。

今日からキャプテンを交替させます。新キャプテンは重村典子です。高島・成井・野田・宮原には肩の荷を下ろしてもらって自分のことに専念し、国体とウィンターカップでは暴れてもらおうと思います。

追伸 野田は骨折線が消えないので九月六日に再手術します。

平成十二年十二月 ウィンターカップ三回戦敗退 スタメン成井 花田 永石 重村姉 重村妹

#### 【案内文書】

紛失

#### 【結果報告】

どんな手を打つてもクレインズペースにならない試合でした。しかし、選手たちは思い通りにならない試合であっても浮き足立つことなく、私の指示をしっかりと理解して戦ってくれました。国体の準決勝の福井戦の前半も同じ状況でした。「ヨシー」と思ったシュートがわずかにリングに嫌われる。それでも選手たちは自分を信じ、仲間を信じて戦い続けました。国体の準決勝と今回の丹原戦の違いは、国体では後半長崎のプレイがリングに嫌われなくなりましたが、丹原戦では最後までリングに嫌われ続けたことだけです。自分を信じ、仲間を信じ、選手たちが何とかして試合の流れを自分たちの方に向けようと努力し続けた姿勢は、国体の福井戦もウィンターカップの丹原戦も変わりません。

今年、丹原とは何回も練習試合をしてきました。丹原と一試合やると他のチームとの三試合分ぐらい疲れます。丹原には目を引く選手はいません。どちらかといえば不器用な選手の集まりだと思えます。しかし、インターハイでもベスト四に進出し、今回またベスト八まで勝ち進みました。どんな小さなことでも一生懸命やるからです。ひたむきだからです。それが徐々に相手にダメージを与え、勝利をもぎ取ってしまうのです。本当に鍛え抜かれたチームです。

負けはしましたが、負けた相手が丹原だったということが悔しさを紛らしてくれました。なぜなら、負けた時つて必ず「あんなチームに…」とか「あんなプレイに…」などと、結果に対してなかなかすなおになれない場合が多いのですが、今回の丹原戦は「こういうチームを高校生らしいチームつて言うんだ」と、むしろ心を洗われたような気がするからです。

八月中旬の九州国体までは、前半と後半、昨日と今日、激変する選手たちに翻弄され続けましたが、冒頭に述べたように、一〇月の国体以降は思い通りにならないながらも精神的に崩れることなく戦えるようになりました。その成長ぶりは認めてやりたいと思います。しかし満足はしていません。私の理想はこのチームを丹原のような粘り強いチームに育て上げ、訓練された鶴鳴の選手を観に来る観客で会場を満員にすることです。

#### 【激闘】

この年、七月下旬の山口遠征で鶴鳴と丹原とはたくさん試合をしたが勝つても負けても点差がすべて一点から三点以内の試合だった。最終日、Aコートで丹原と鶴鳴、Bコートで山口成年女子と山口少年女子が試合をしていた。と、途中でBコートの試合はやめて両チームの選手もスタッフも審判も全部Aコートの周囲に集まってきた。鶴鳴対丹原の試合を観るためだ。

試合は大接戦。それを裁いているのが国際審判の小池先生。審判も国際級なら試合もオールジャパンの決

勝戦並。真夏に観覧席もなく冷房も効かない地方の体育館でやるにはもったいない白熱した試合だ。残り一分を切って丹原が一点リードで鶴鳴の攻撃、鶴鳴の攻撃が成功すればほぼ鶴鳴の勝ちが決まり、丹原が守りきれれば丹原の勝ちがほぼ決まるという場面だった。鶴鳴の花田が正面からドライブを仕掛けた。花田は抜き去ってレイアップに持って行ったが丹原の奥岡選手が粘って抜かれずにくっついていった。花田はやむなくフェイドアウェイぎみにジャンプしてフックぎみのシュートを放ってそれを決めた。

その時丹原の瀬良先生がベンチから発したことは今でも覚えている。そのことは「ヨーシヨシ、素質でやられるのは仕方がない！」だった。瀬良先生と言えばこわもて指導者で世に知られている。しかし、このことばで私は彼に対する見方を変えた。彼は努力とか訓練をとんでも大事にする指導者で手を抜かない訓練を経て最大の努力を払って出た結果に対してはすべて「ヨシ！」なのだ。

私はこれまで全国あちこちのチームと試合をしているんな指導者と出会ったが、選手は精一杯の努力をしたのに結果が悪ければその選手が監督からボコボコにされている場面を何回も見たことがある。そんな私にとって瀬良先生の「ヨーシヨシ」は私をホッとさせてくれた。